

英雄神インドラの名と役割  
—ヤースカの語源学と神学の視点から—

川 村 悠 人

広島大学大学院文学研究科論集 第79巻（2019年12月）別刷

*THE HIROSHIMA UNIVERSITY STUDIES*  
*GRADUATE SCHOOL OF LETTERS*

VOL. 79 · DECEMBER 2019

# 英雄神インドラの名と役割

—ヤースカの語源学と神学の視点から—

川 村 悠 人

【キーワード】 古代インド、雷霆神、雷光、語源学、神学

## 1. 本稿の目的

古代インドの語源学者ヤースカ（紀元前5世紀から紀元前4世紀頃）が著したサンスクリット文献『語源学』（Nirukta）は、神々への賛歌集『リグ・ヴェーダ』（Ṛgveda、紀元前一二〇〇年頃に編集固定）に現れる難語の語源説明を企図した作品である。自らを「アーリヤ」と称する諸部族が、紀元前一五〇〇年頃からヒンドゥークシュ山脈を越えてインダス上流域に波及的に進出し、次々に編纂していった宗教儀礼文献を総称してヴェーダと呼ぶ。『リグ・ヴェーダ』は、それらヴェーダ諸文献のうち、神々を祭場に招来し歓待するための賛歌が集められた南アジア最古の文献である。

一八〇〇年代に校訂本が出版されて以来（Roth 1852）、これまでの『語源学』研究は、ヤースカが語源説明との連絡の中で説くサンスクリット言語理論の解明に心血を注いできた。多くの研究の蓄積により、現在我々はヤースカの言語理論の大枠を容易に知ることができるようになり、西洋文化における語源学の伝統との比較研究もなされうる段階に至っている。その一方で、ヤースカが『リグ・ヴェーダ』における神々の描写に立脚しながら神名の語源説明に関連して展開したヴェーダ神学、世界を成り立たせている神々のあり方を示す議論は、従来、等閑に付されてきた。言語理論の研究が優先されてきたためである。他方、いかなる文化体系においても何かしら神的存在をめぐる思索が連綿となされてきたであろうことを考えれば、ある古代の思想家が神々の世界、姿、役割等をどのようにとらえたかを考察し明らかにすることは、広く人文学領域の研究にとって貴重な資料と知見を提供するものとなりうる。今後この方向での『語源学』研究が積極的に推し進められるべきであると考ええる。

このような問題意識から、本稿ではヤースカが語源学者としての視点から描く英雄神インドラの姿を浮き彫りにしてみたい。インドラは、『リグ・ヴェーダ』の中で最も多くの讃歌を捧げられる当時の主神であり、後にヒンドゥー教や仏教にも取り入れられている。時代が下るにつれてその地位は低下し性格も変化するとはいえ、インド文化を形づくる神の一人である。漢訳仏典では「帝釈天」と訳され、本邦にも伝わっている。インドラは、日本では比較的知名度の高い神で

あり、ゲームやアニメなどの娯楽物にも時折登場する。古代インドの神インドラについて概観した上で、この神に対する一人の思想家の見方を説明することは、純粋な学術的研究のみにとどまらず、現代文化の深い理解にもつながるものである。

## 2. 『リグ・ヴェーダ』におけるインドラとその周辺

ヤースカの具体的な議論に入る前に、彼が議論の素材として主に活用する『リグ・ヴェーダ』それ自体においてインドラとそれを取り巻く要素がどのように現れるか、その大綱を以下に示す。それにより、ヤースカによるインドラ解釈の位置づけが見えやすくなると考えるからである。

インドラは、『リグ・ヴェーダ』の中で、最も高い人気を誇る武勇神である。部族の守護、維持、繁栄は彼にかかっている。賛歌中で語られるインドラの武勲のうち、主要な位置を占めるのはヴリトラ殺しのそれである。ヴリトラ (*vṛtrá*) は水をたたえた原初の山を囲って水を閉じ込める蛇 (*áhi*) であり、インドラは戦棍ヴァジュラ (*vájra*) を振るってこの大蛇を倒し、世界に水を開放する<sup>1)</sup>。

印欧語族は、金槌かそれに類する武器を手にした雷神を文化の中に有していたと考えられているが (Fortson 2010: 26)、後代の解釈はさておき、『リグ・ヴェーダ』には雷のみに特化した神は現れず、インドラも決して雷霆神ではない。彼が手にする武器の名ヴァジュラは元来「棍棒」を意味し、敵に投げつけられることはあるが、決して雷光や雷撃ではない。後のヒンドゥー教に顕著なように、インドラが雨を降らせる神と見なされるようになり、その地位を固めると、ヴァジュラも降雨現象との関連のもと「雷光、雷撃」との結びつきが強くなっていったと考えられる。おそらく、このような後代の思想が『リグ・ヴェーダ』に持ち込まれ、さらに他の印欧語族の神話体系からの類推も加わって、『リグ・ヴェーダ』に描かれるインドラを雷霆神とする理解が国内外を問わず人口に膾炙しているが、それはインドラの本来の姿ではない。雨をもたらすというインドラの機能自体はすでに『リグ・ヴェーダ』に確認されるが (例えば RV IV.26.2)、インドラに雷霆神としての姿を、ヴァジュラに雷光 (Blitz) や雷撃 (Donnerkeil) の性質を想定する個所は例外的で (cf. Witzel und Gotō 2007: 583)、インドラの本質に関わるものではない。これが現ヴェーダ学界の通常の見解である。ヴェーダ文化では、基本的に、雨を降らせる役割は雷雨の神パルジャンヤ (*parjanya*) が担う。

未だ解決していない問題は、このように極めて断片的な姿が、なぜインドラを特徴づけるものへと変化していったかである。その契機となったものは何か。この問題については語源的観点から日本歴史言語学会二〇一九年大会 (広島大学) にて論考を発表予定であり、同学会発行の雑誌『歴史言語学』にそれを投稿する予定がある。現在のところ、以下に示すヤースカから語源学者が与えた解釈が、インドラを、雷光ヴァジュラを振るって雨を降らせる雷霆神とするインド伝統の形成に一役買った可能性を考えている。

### 3. 神の分類と世界の三大神

#### 3.1. 『用語集』とその第五章の構成

ヤースカが著した『語源学』は、その名の通り、様々なサンスクリット語の語源を論ずる作品である。とはいえ、当時ヤースカが知っていたありとあらゆる単語がとりあげられ、議論されるわけではない。彼がとりあげ、語源説明を試みる対象は、『用語集』(Nighaṅṭu、作者不明)と呼ばれる語彙集に含まれていた諸々のヴェーダ語である。『用語集』は、ヴェーダ諸文献のうち、とりわけ『リグ・ヴェーダ』に現れる語源的に説明が難しい語を五章にわたって採録している。『用語集』第一章から第三章は各主題ごとに分類される同義語(約一四五二語)、第四章は様々な多義語および形成法が不明な諸語(約二七八個)、第五章は多様な神々の名(約一五一個)をそれぞれ集めたものである。

このうち、神名を収録する『用語集』第五章は六つに区分されている。すなわち、第五章第一節から第三節では地上に住まうと見なされた神々の名、第四節から第五節では中空に住まうと見なされた神々の名、そして第六節では天に住まうと見なされた神々の名が列挙される。世界は地、空、天の三領域からなるというのが『リグ・ヴェーダ』以来の伝統的な考え方であり(後藤2009: 107)、この『用語集』の分類はそのような世界観に従ったものである。

#### 3.2. ヤースカの神界観

ヤースカは『語源学』第七章第五節ならびに同章第八節から第一一節における議論を通じて、地上の神々、中空の神々、天の神々はそれぞれを代表する主要な三神に集約されることを示している。主要な三神とは、地上の火神アグニ、中空の英雄神インドラ、天の太陽神スーリヤ／アーディティヤである。彼は『語源学』第七章第五節においては中空を統べる神を風神ヴァーユまたはインドラとして選択肢を与えているが(Nirukta 7.5 [135.3-4]: *tisra eva devatā iti nairuktāḥ | agniḥ pṛthivīsthānaḥ | vāyur vendro vāntarikṣasthānaḥ | sūryo dyusthānaḥ*)、後にそれをインドラのみにしぼっている。すなわち、天空地をそれぞれ支配する三大神の分け前(*bhakti*)を説明する際、ヤースカは中空の主神としてインドラのみを出す(Nirukta 7.10 [137.8]: *athaitānīndrabhaktīni | antarikṣalokaḥ | mādhyandināṃ savanam | grīṣmaḥ...*)。彼が最初に風神にも言及したのは、地に火神、空に風神、天に太陽神を配置する『リグ・ヴェーダ』以来の思考法に配慮したためと考えられる。

RV X.158.1: *sūryo no divās pātu vāāto antāriṣṣāt | agnir naḥ pārthivebhyaḥ ||*

スーリヤ(太陽[神])は我々を天から守れ。ヴァータ(風[神])は中空から。アグニ(火[神])は我々を諸々の大地から。

AB V.32.1: *agnir eva pṛthivyā ajāyata vāyur antarikṣād ādityo divaḥ |*

他ならぬアグニ（火〔神〕）は大地から生まれた。ヴァーユ（風〔神〕）は中空から。アーディティヤ（太陽〔神〕）は天から。

一方で、アグニ、インドラ、スーリヤという三区分もヴェーダ祭儀書文献（ブーラフマナ）には見られるようになる。この分類法がヤースカの神界観の基礎をなすと思われる。

AB II.37.17: *bhūr agnir jyotir jyotir agnir indro jyotir bhuvo jyotir indrah | sūryo jyotir jyotir svah sūryah |*

ブール、アグニは光である、光はアグニである。インドラは光である、ブヴォー、光はインドラである。スーリヤは光である、光は、スヴァハ、スーリヤである<sup>2)</sup>。

ここで浮かんでくる当然の疑問は、なぜヤースカは中空の主神として風神ヴァータ／ヴァーユではなく英雄神インドラを選んだかということである。その理由の一つには、もちろん、インドラが『リグ・ヴェーダ』において圧倒的な崇拝を集めていることがあろう。これに加えて、後に見るヤースカの火の思想も彼がインドラを中空の主神とした背景にあると考えられる。

#### 4. インドラの主要な行為

ヤースカによれば、肉体的な力をもって遂行されるもの (*balakṛti*) は何であれ全てインドラの行為 (*karman*) と見なされるが、そのうちで、彼がなす主要な行為は「ヴリトラを打ち殺すこと」(*vṛtravadha*) と「水（精髓）を与えること」(*rasānupradāna*) である (Nirukta 7.10 [137.10])。言うまでもなく、『リグ・ヴェーダ』に描かれる、ヴリトラを倒して水を解放するというインドラの武勲がヤースカの念頭にある。以下に、この武勲をヤースカがどのように解釈したかについて検討する。

##### 4.1. 『用語集』と『語源学』におけるヴリトラ

*vṛtra* の原義は「障碍」で本来は中性名詞だったが、この意味は複数形のみを保たれ、単数男性形ではすでに『リグ・ヴェーダ』の段階で蛇の姿をした魔物を指示するに至っている（その歴史的背景については後藤 1994: 9）。『リグ・ヴェーダ』では決してヴリトラは「雲」ではないことに注意したい。『リグ・ヴェーダ』以降のヴェーダ諸文献で *vṛtra* という語に対して与えられる語源解釈を見ても、同語を「雲」と結びつける解釈は見当たらない (Deeg 1995)。

ところが『用語集』を見てみると、*vṛtra* という語は「雲」(*megha*) を意味する語群 (Nighaṇṭu 1.10) あるいは「富」(*dhana*) を意味する語群 (Nighaṇṭu 2.10) に挙げられている（後者は雲の内部に溜められている水を「富」と理解した上での比喩表現か）。これと関連して蛇を意味する

*ahi* という語も雲を意味する語群 (Nighaṅṭu 1.10) に挙げられ、さらにこの語は「水」(*udaka*) を意味する語群 (Nighaṅṭu 1.12) にも含まれている (後者は蛇の討伐と水の解放という因果関係を根拠とした比喩表現か)。ここに、蛇の姿で水を閉じ込める魔物ヴリトラを「雲」とし、当該の水を雲の内部にある「雨水」とする理解を見てとれる。ヤースカもまた、『語源学』第二章第一六節において、語源学者たちはヴリトラを「雲」と理解すると述べており (Nirukta 2.16 [52.16]: *tat ko vṛtraḥ | megha iti nairuktāḥ*)、*vṛtra* という語は動詞語根 *var/vṛ* 「覆う」、*vart/vṛt* 「回転する (循環する)」、あるいは *vardh/vṛdh* 「増大する」からの派生形であると言う。いずれも雲と関連する行為を表示する動詞語根である。

Nirukta 2.17 (53.8 – 10): *vṛtro vṛṇoter vā | vartater vā | vardhater vā | yad avṛṇot tad u vṛtrasya vṛtratvam iti vijñāyate | yad avartata tad u vṛtrasya vṛtratvam iti vijñāyate | yad avardhata tad u vṛtrasya vṛtratvam iti vijñāyate |*

*vṛtra* [という語] は動詞語根 *var/vṛ*、*vart/vṛt*、あるいは *vardh/vṛdh* に基づく。覆ったこと (*yad avṛṇot*)、それが、他方、ヴリトラのヴリトラたる所以であると認められている。回転 (循環) したこと (*yad avartata*)、それが、他方、ヴリトラのヴリトラたる所以であると認められている。増大したこと (*yad avardhata*)、それが、他方、ヴリトラのヴリトラたる所以であると認められている<sup>3)</sup>。

*vṛtra* という語が水の解放に関わる文脈に現れる事実から、ヴリトラを「雲」と見なす説が生まれ、このような語源解釈が採用されたと推測される。語源学者らにとってヴリトラが雲であるならば、ヤースカがインドラの主要行為として述べる「ヴリトラを打ち殺すこと」は、すなわち雲を壊すことであり、「水 (精髓) を与えること」は、すなわち雲の内部に溜まっていた雨水を世に解放することである。

#### 4.2. 降雨現象の説明

以上のように、ヤースカは、『リグ・ヴェーダ』に描かれるヴリトラ殺しとその結果としての水の解放を、雲の破壊と雨水の生出としてとらえ、ヴリトラを雲に、水を雨水にそれぞれ対応させている。ではヴリトラを倒すインドラは何に対応するのか。この点について、降雨現象について説明した以下の一節を見てみよう。

Nirukta 2.16 (52.17–18): *apām ca jyotiṣaś ca miśrībhāvakarmanṇo varṣakarma jāyate | tatropamārthena yuddhavarṇā bhavanti | ahivat tu khalu mantravarṇā brāhmaṇavādās ca |*

諸々の水と光が混じり合うことから降雨が生じる。その[降雨]に関する比喩的な意味をもって、[インドラとヴリトラの] 戦闘に関する諸々の描写がなされている。また周知のように、

[ヴリトラに対する] 祭文の諸々の描写とブラーフマナ文献の諸々の論説は蛇に対するが如くである。

ヤースカによれば、水と光が混じり合うことで雨が降る。これは、雷光がきらめく中で雲から雨水が降り注ぎはじめる自然現象の観察をもとにした説明である。ここから、ヤースカの思想では、降雨という自然現象は、雲、雨水、雷光の三要素から成り立つものと言える。さらに、ヤースカの解釈によれば、このような降雨現象が、『リグ・ヴェーダ』などのヴェーダ文献ではヴリトラ殺しを通じたインドラによる水の解放として比喩的に描かれており、実際は雲であるヴリトラが蛇に例えられている。語源学者らは概して比喩的な解釈を好むようである (Kahrs 1998: 27)。

降雨現象を構成する雲、雨水、雷光のうち、雲がヴリトラ、雨水がヴリトラに閉じ込められた水にそれぞれ対応するならば、必然的に、雷光はヴリトラを討つインドラに対応することになる。つまり、雷光がきらめく中で雲々から雨水が降り注ぎはじめる自然現象が、『リグ・ヴェーダ』ではインドラが武器ヴァジュラを振るいながら蛇ヴリトラを倒して水を解放する描写によって比喩的に表現されている、とヤースカは解したことになる。ここに、本来は棍棒を意味していたインドラの武器ヴァジュラが、雷光／雷撃と結びつけられる下地が用意されている。ただし、このヤースカの解釈のもとでは、インドラ自体が雷光である点に注意したい。『語源学』中で、ヤースカがヴァジュラを雷光や雷撃に特定している個所は見当たらない。憶測になるが、ある段階でインドラが雷光そのものではなく雷光を操る神と見なされるに至り、ヴァジュラが雷光に取って代わったのかもしれない。

ヤースカの神学のもと、インドラが雷光にあたる場合、彼が振るう武器ヴァジュラが自然界の何にあたるのかははっきりしない。「ヴァジュラを手にしたインドラ」という全体で雷光を象徴するとヤースカは考えたのであろうか。

## 5. 「インドラ」という名の語源

インドラを「雨をもたらす神」ととらえる考えは、ヤースカがなす神名 *indra* の語源説明にも現れている。

### 5.1. 学界の見解

*indra* という語の語源については、これまで様々な見解が提出されているものの、言語学的に確定的な語源は分かっていない (cf. Mayrhofer 1986–2001: I.192–193)。i, n, r が母音または子音として実現する際に働く法則に従えば、*indra* ではなく \**yadra/yan(d)ra* という形が期待されるため、*indra* という語は印欧語としては異例の形をとっている。それゆえ、同語は、バクトリア・マルギアナ考古複合から影響を受けた借用語である可能性が想定されている (以上については後藤



2013: 312; 後藤 2014: 46 with note 4)。

## 5.2. ヤースカの解釈

ヤースカは神名 *indra* に対していくつかの視点から複数種の語源説明を施している。その全体像と歴史的背景の詳細については、上述した学会と雑誌にて発表予定の原稿に譲る (§2)。ここでは、ヤースカが最初に出す語源説明の型 – それゆえ彼が最もよくインドラの性格を表すと考えた可能性がある語源説明の型 – を見ておきたい。そこでは *irā* 「滋養」という語を利用した以下の五つの語源説明が与えられる (Nirukta 10.8 [175.15–16])。ヤースカの語源説明法の諸原則については川村 2019を参照されたい。手短かに言えば、音の同一性あるいは類似性を根拠とした通俗語源解釈である。

1. 「滋養を穿ち開ける者」 (*irām dṛṇāti*)
2. 「滋養を与える者」 (*irām dadāti*)
3. 「滋養を定めおく者」 (*irām dadhāti*)
4. 「滋養を穿ち開ける者」 (*irām dārayate*)
5. 「滋養を保持する者」 (*irām dhārayate*)<sup>4)</sup>

「滋養」は文脈に応じて様々なものを指しうると考えられるが、ヤースカの神学において、インドラの性格に沿うここでの意味は明らかに「雨水」である。上に見た通り、ヤースカにとって、インドラがなす主要な行為は雲を壊して雨水をもたらすことに他ならない。上の1から4はこの「雨水をもたらす」という意味との関連のもと理解できる。5については「雨水の支配権をもつ」という方向での理解が成り立つであろう。「滋養」(*irā*) が「雨水」を指示するものとして使用される例はすでに『リグ・ヴェーダ』にある (例えば RV VII.65.4、阪本 [後藤] 2015: 12)<sup>5)</sup>。 *irā*、*irā*、*irā* はいずれも同種の意味を有する異形である。

*indra* という語に対するこのような型の語源解釈は前代のヴェーダ文献にはなく (Deeg 1995)、当時の理解の仕方を反映した語源学者ら (もしくはヤースカ) の新説と思われる。この第一の型の語源解釈に重きが置かれていることは、語源解釈を提示した後、インドラの特徴を描く詩節としてヤースカが引く二つの詩節のうち、最初に引かれる『リグ・ヴェーダ』五・三二・一がヴリトラ殺しと水の解放を描く詩節であることから分かる。加えて、上の語源解釈1で使用された動詞語根 *dar/dṛ* が当該詩節でも使用されていることは、この詩節がその解釈の根拠の一つとなっていることを示唆する。以下に詩節を引用しておく (cf. 堂山 2005: 43, note 83)。参考のため、現在のヴェーダ学的見地から妥当と思われる詩節解釈とヤースカの詩節解釈を併記する形で挙げる。



RV V.32.1: *ádardar útsam ásṛjo ví khāni*  
*tvám arṇavān badbadhānām aramṇāh |*  
*mahāntam indra párvatam ví yád váh*  
*sṛjó ví dhārā áva dānavam han ||*

お前は泉を穿ち開けた。お前は諸々の裂け目を広く開放した。

お前は絶えず圧迫されていた諸々の激流を静めた。

インドラよ、お前が巨大な山を開けるとき、

お前は諸々の水流を広く開放する。お前はダーナヴァを打ち伏せる。

[ヤースカ解釈] お前は泉を穿ち開けた。お前は[泉へと続く]裂け目を広く開放した。

お前は激流をたたえて (*arṇavān=arṇasvataḥ*) 絶えず圧迫されていた[雲々の群 (*saṁstya*)]を制御した。インドラよ、お前が巨大な雲を (*párvatam=megham*) 開けたとき (*ví . . . váh=vyavṛnoḥ*)、お前は[その雲の] 諸々の水流を広く開放した (*sṛjó ví=vy asṛjah*)。お前は[水の] 施与をなす者(雲)を (*dānavam=dānakarmānam*) 打ち伏せた (*áva . . . han=avāhan*)。

前述した *irā* を利用する語源解釈の型の中で、最初にくる解釈 *irām dṛṇāti* のみが *indra* という語を構成するすべての音に対応する音(同一の音および類似した音)を持つので、これがヤースカの最も好む解釈かもしれない。ただし、ヤースカが複数の語源解釈を提示するとき、それらの間に優劣関係が想定されているかについては定かではなく、将来的にさらなる検討を要する。

## 6. ヤースカの火の思想

ヤースカは『語源学』第七章第一四節から第三一節において、『用語集』第五章第一節にあがる火の三神、すなわちアグニ (*agni*)、ジャータヴェーダス (*jātavedas*)、ヴァイシュヴァーナラ (*vaiśvānara*) を、それぞれ地上の祭火、中空の雷光 (*vidyut*)、天の太陽 (*āditya*) と想定し<sup>6)</sup>、それぞれの名の語源や性格について論じている。そして、最終的にヤースカは、後者の二つを地上の祭火アグニがとる姿の一つに過ぎないとし、アグニに主要性を認める (Nirukta 7.18 [141.1-2]; 7.20 [142.6-7]; 7.31 [148.14-15])。さらに彼は、唯一の存在物を詩人らが多様な仕方でも語ることを歌う『リグ・ヴェーダ』一・一六四・四六を解釈する中で、この地上の祭火アグニを偉大なるアートマン (*mahāntam ātmānam*) と呼び (Nirukta 7.18 [140.16])、他の個所ではそれを一切の神々の根源とする立場を表明している (*ātmā sarvaṁ devasya*, Nirukta 7.4 [134.13-135.2])。アグニを世界の源と見る思想は『リグ・ヴェーダ』以来のものである<sup>7)</sup>。このような火の思想のもとでは、天空地の三領域を支配する三大神としてはそれぞれ何かしら火や光と密に繋がる存在が要求される。そこでヤースカは、伝統的に認められていた天空地の三神のうち (§ 3.2)、中空の神としては、風神ヴァーユ/ヴァータではなく、雷光と同定されうるインドラを採用し、世界を火や光で統一

する思想を完成させた可能性がある。

ここで一つの疑問が生じる。もしインドラが雷光の神格化であるならば、その位置づけは中空の火である雷光ジャータヴェーダスと重なる。インドラとジャータヴェーダスの関係をどのように理解すればよいのか。単純に、両者は同一の存在であると考えてよいのか。それとも、それぞれ別の機能を担う異なる神なのか。残念ながらヤースカは両者の関係について明確には語っていない。他方、後の時代にヤースカの議論も参照しながら『リグ・ヴェーダ』の神々について整理した学者シャウナカ（五世紀頃）は、『大神格』（Bṛhaddevatā）において両者を同一視している。本稿ではこの問題にはこれ以上立ち入らず、シャウナカが残した詩節を付記するにとどめておく。

BD 2.30: *vidyate sarvabhūtair hi yad vā jātaḥ punaḥ punaḥ |*  
*tenaiṣa madhyabhāg indro* <sup>8)</sup> *jātavedā iti stutaḥ ||*

あるいは、何度も生まれる者として (*jātaḥ*) 全生類に確かに知られている (*vidyate*) ことから「ジャータヴェーダス」(*jātavedas*) という [名] で賞賛されているこの者は、中 [空] を享受するインドラである。

## 7. 結論

ヤースカはある神名の語源説明を行う際、原則として、当該の神名が現れる『リグ・ヴェーダ』の詩節により供給される文脈に沿う形でそれを行っている。そのような詩節は議論の中で引用される場合もされない場合もあるが、基本的に、語源解釈の根拠となる詩節には問題の神名により指示される神がなす何らかの行為が描かれており、ヤースカにとって、その行為こそがその神を特徴づけるものである。そして、神が当該の行為を特徴とする者であるならば、神の名はその行為と密接に関連する意味を有していなければならない。名は対象を規定するものだからである。

『リグ・ヴェーダ』を見たとき、そこにはインドラの武勲として水の解放を歌う讃歌が際立っており、そのことを根拠として「滋養（雨）をもたらす者、滋養（雨）を保持する者」を神名 *indra* の有力な第一の語源的意味としてヤースカは設定したと考えられる。ヤースカにとり、水を閉じ込めるヴリトラは中空に漂う雲、ヴリトラに閉じ込められた水は雲の内部にたくわえられた雨水、ヴリトラを倒して水を解放するインドラは、雲を裂いて雨水を降らせる雷光である。『リグ・ヴェーダ』が描く、インドラによるヴリトラ殺しと水の解放は自然界の降雨現象を比喩的に表現したものである。

ヤースカの神学において、インドラの主要な姿は中空の火である雷光の神格化としてのそれであり、彼は中空領域を支配しながら人間生活に必要な雨水を授けることを第一の役割とすると結論できる。

## 略号と参考文献

AB: *Aitareya-Brāhmaṇa*. See Aufrecht 1879.

BD: Śaunaka's *Bṛhaddevatā*. See Tokunaga 1998.

Nighaṅṭu: *Nighaṅṭu*. See Nirukta.

Nirukta: Yāska's *Nirukta*. See (1) Roth 1852 and (2) Sarup 1920–1927. [References of the text of the Nirukta are to pages and lines of (2).]

ṚV: *Ṛgveda*. See Aufrecht 1877.

TS: *Taittirīya-Saṃhitā*. See Weber 1871–1872.

Aufrecht, Theodor. 1877. *Die Hymnen des Rigveda*. 2 vols. Bonn: Adolph Marcus.

—. 1879. *Das Aitareya Brāhmaṇa: Mit Auszügen aus dem Commentare von Sāyaṇācārya und anderen Beilagen herausgegeben*. Bonn: Adolph Marcus.

Deeg, Max. 1995. *Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yāska's und seiner Vorgänger: Eine Untersuchung über ihre Praktiken, ihre literarische Verbreitung und ihr Verhältnis zur dichterischen Gestaltung und Sprachmagie*. Dettelbach: Jasef H. Röhl.

Dōyama, Eijirō (堂山 英次郎). 2005. 『リグヴェーダにおける一人称接続法の研究』『大阪大学大学院文学研究科紀要・モノグラフ編』第45巻-2.

Fortson IV, Benjamin W. 2010. *Indo-European Language and Culture: An Introduction*. Second edition. Chichester: Wiley-Blackwell.

Gotō, Toshifumi (後藤 敏文). 1994. 「神々の原風景－ヴェーダ」『インドの夢・インドの愛－サンクリット・アンソロジー』(上村勝彦・宮元啓一 編) 所収 (pp. 3-35) 東京: 春秋社

—. 2009. 「古代インド文献に見る天空地」『天空の神話－風と鳥と星』(篠田知和基 編) 所収 (pp. 107-125) 名古屋: 楽瑯書院

—. 2013. 「アーリヤ諸部族の侵入と南アジア基層世界」『インダス 南アジア基層世界を探る』(長田俊樹 編) 所収 (pp. 295-316) 京都: 京都大学学術出版会

—. 2014. 「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える」『国際哲学研究』3: 43-57.

Gupta, Tapan Kumar Das. 1975. *Der Vajra: Eine vedische Waffe*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Hopkins, E. Washburn. 1916. "Indra as God of Fertility." *Journal of the American Oriental Society* 36: 242-268.

Jamison, Stephanie W. 1983. *Function and Form in the -āya-Formations of the Rig Veda and Atharva Veda*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

- Jamison, Stephanie W. and Joel P. Brereton. 2014 *The Rigveda: The Earliest Religious Poetry of India*. 3 vols. New York: Oxford University Press.
- Kahrs, Eivind. 1998. *Indian Semantic Analysis: The nirvacana Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kawamura, Yūto (川村 悠人). 2019. 「古代インドにおける語源学学習の四目的」『比較論理学研究』16: 29–46.
- Kobayashi, Enshō (小林 圓照). 1980. 「金剛杵を執るインドラ神の周辺－リグ・ヴェーダ理解のための基礎的考察－」『花園大学研究紀要』11: 27–51.
- Lahiri, Ajoy Kumar. 1984. *Vedic Vṛtra*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Macdonell, Arthur Anthony. 1904. *The Bṛhad-devatā Attributed to Śaunaka: A Summary of the Deities and Myths of the Rigveda, Critically Edited in the Original Sanskrit with an Introduction and Seven Appendices, and Translated into English with Critical and Illustrative Notes*. Part I, introduction and text and appendices. Cambridge, Massachusetts: Harvard University.
- Matsumura, Kazuo (松村 一男). 2019. 『神話学入門』東京：講談社（『神話学講義』[東京：角川書店、1999]の文庫版）
- Mayrhofer, Manfred. 1992–2001. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*. 3 bde. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Michael Witzel, Toshifumi Gotō, and Salvatore Scarlata. 2013. *Rig-Veda: Das Heilige Wissen. Dritter bis fünfter Liederkreis*. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel (Buch III), Toshifumi Gotō (Buch IV) und Salvatore Scarlata (Buch V). Berlin: Verlag der Weltreligionen.
- Roth, Rudolph. 1852. *Jāśka's Nirukta sammt den Nighaṇṭavas*. Göttingen: Verlag der Dieterichschen Buchhandlung. [1852a = text, 1852b = notes and translation.]
- Saitō, Hiromi (斎藤 弘美). 1987. 「『リグ・ヴェーダ』の戦う神インドラについて－その機能の変遷に関する一考察－」『東方』3: 106–114.
- Sakamoto-Gotō, Junko (阪本[後藤]純子). 2007. 「「究極の Agnihotra」を巡る Janaka 王と Yājñavalkya との対話－ ŚB-M XI 3,1, ŚB-K III 1,4, JB I 19f., VādhAnv II 13－」『論集』（印度学宗教学会）34: 427–484.
- . 2015. 『生命エネルギー循環の思想－「輪廻と業」理論の起源と形成－』龍谷大学南アジア研究センター伝統思想シリーズ24
- Sarup, Lakshman. 1920–1927. *The Nighaṇṭu and the Nirukta, the Oldest Indian Treatise on Etymology, Philology, and Semantics*. (Introduction, London; New York: Oxford University Press, 1920; English Translation, London; New York: Oxford University Press, 1921; Sanskrit Text, with an Appendix Showing the Relation of the Nirukta with Other Sanskrit Works, Lahore: University of the Panjab, 1927).

- Tokunaga, Muneo. 1998. *The Bṛhaddevatā: Text Reconstructed from the Manuscripts of the Shorter Recension with Introduction, Explanatory Notes, and Indices*. Kyoto: Rinsen Book Co.
- Tsuji, Naoshirō (辻 直四郎). 1967. 『インド文明の曙－ヴェーダとウパニシャッド』 東京：岩波書店
- Watanabe, Shōgo (渡辺 章悟). 2006. 「vajra 考」『東洋学論叢』 31: 165–180.
- . 2007. 「Vajra 考 (2) : 石とダイヤモンド」『東洋学論叢』 32: 92–113.
- Weber, Albrecht. 1871–1872. *Die Taittirīya-Saṃhitā*. 2 Bde. Leipzig: Brockhaus.
- Witzel, Michael. 2005. “Vala and Iwato: The Myth of the Hidden Sun in India, Japan, and beyond.” *Electronic Journal of Vedic Studies* 12-1: 1–69.
- . 2008. “Slaying the Dragon across Eurasia.” In *Hot Pursuit of Language in Prehistory: Essays in the Four Fields of Anthropology (In Honor of Harold Crane Fleming)*, edited by John D. Bengtson. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 263–286.
- Witzel, Michael and Toshifumi Gotō. 2007. *Rig-Veda: Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis*. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić. Frankfurt am Main und Leipzig: Verlag von Weltreligionen.
- Yūto Kawamura, Eijirō Dōyama, and Kenji Takajhashi (川村 悠人・堂山 英次郎・高橋 健二). 2019. 「神の名の意味を知ること－神名アグニの分析に見るヤースカの語源学と神学」『南アジア古典学』 14: 179–203.

## 註

<sup>1)</sup> ヴリトラ殺しの神話を扱う先行研究とその評価については Lahiri 1984: 1–25を見よ。なお、蛇殺し／竜殺しの神話に見られる特徴の一つとして、大蛇に捧げられる運命にある乙女のもとに英雄が現れ、大蛇を倒し、乙女と結ばれることが挙げられるが（日本神話でもスナノヲ「荒れすさぶ男」はヤマタノオロチを退治してクシナダヒメを救い、彼女と結ばれる）、ヴェーダ文献が描くインドラのヴリトラ退治には「若い乙女の救出」という要素は見られない。その一方で、日本でもインドでもある種の効果をもたらす液体が物語に関わる点は共通する (Witzel 2005: 25; Witzel 2008: 272, 276)。すなわち、ヴェーダ神話では、インドラが、ソーマ草（麻黄の一種）を獲得し、その絞り汁に酔い、活気付けられてヴリトラを討つ。日本神話では、スナノヲが何かしらの液体を飲むわけではないが、彼はヤマタノオロチの一つ一つの頭に酒を飲ませ酔わせた上で倒す。このように、対象を通常時とは異なる状態へと導く液体が用いられる点に共通性が見られる。

インド・イラン側の神話と日本側の神話には内容だけではなく言語表現の上でも類似性が

種々指摘されており (例えば Witzel 2005)、実りある課題が多く残されていると思われる。本稿は神話の比較検討を目指すものではないが、この種の将来的な神話研究にとっても何かしらの資料となりうることを期待する。

- 2) この祭文中に挿入されている「ブール . . . ブヴォー . . . スヴァハ」 (*bhūr . . . bhuvo . . . svaḥ*) は祭式の様々な場面で使用される聖句である (*bhūr bhúvaḥ svàr*)。この聖句の解釈については 阪本 (後藤) 2007: 481 with note 11 を参照せよ。
- 上の引用から明らかなように、『アイタレーヤ・ブラーフマナ』は太陽をアーディティヤとも表現している。これはヤースカの『語源学』でも同じで、彼は世界の三大神を挙げる際には太陽神に対してスーリヤという言葉を一おそらく『リグ・ヴェーダ』の語法に依拠して—適用するが、後にそれをアーディティヤという言葉で言い換えている (Nirukta 7.11 [137.14]: *athaitāny ādityabhaktīni | asau lokāḥ | ṛtīyasavanam | varṣā . . .*)。ヤースカの語法において、スーリヤとアーディティヤという言葉はいずれも太陽または太陽神を指す。
- 3) それぞれの言明の典拠は不明であるが、第一のものに関しては『タイッティリーヤ・サンヒター』に類似のものが見られる。TS II.4.12.2: *sá imám lokán avṛṇot | yád imám lolán avṛṇot tát vṛtrásya vṛtratvám* | (「それで [彼は] これら諸世界を覆った。これら諸世界を覆ったこと、それがヴリトラのヴリトラたる所以である」)
- 4) *dhārayate* という中動形の意味については *dhārayati* という能動形のそれと等価なものと解する。Jamison 1983: 95, note 40 を見よ。
- 5) 阪本 (後藤) 2015: 12 「天から降ってくる雨水を「溶かしバター」および「滋養」と言っています。なぜなら、人間が供物として祭火に注いだ溶かしバターが、祭火の道を通って天に至り、今度は天から循環して地上に降り、溶かしバターが雨に変身するのです。それが地面に滋養を与え、植物を成長させ、その植物を食べて動物 (牛) が育ち、乳を出し、その乳を飲み、また乳からバターを作り、人間も生きていく。このように雨水も溶かしバターも命を育む滋養として同一視されています。」
- 6) ヤースカは、中空の火と天の火を指して「[地上より] 上方にいる例の二つの光であるアグニ」 (*ete uttare jyotiṣī agnī*) という言い方をする一方で (Nirukta 7.16 [140.2])、中空の火および天の火から地上の火が生まれるという説を紹介する『語源学』第七章第二三節において、中空の火が雷光 (*vidyut*)、天の火が太陽 (*āditya*) であることを明示している (Nirukta 7.23 [144.1-5])。
- 7) 以上のようなヤースカの火の思想については、現在 Paolo Visigalli 准教授 (Shanghai Normal University) と共同で準備中の別稿にて詳細に論ずる予定である。
- 8) Macdonell 本 (Macdonell 1904) では BD 2.31 に対応する詩節である。同本で *madhyabhāg indro* は *madhyabhāgendro* と読まれているが、意味は変わらない。



## On the Name and Role of Indra: From the Viewpoint of Yāska's Etymology and Theology

Yūto KAWAMURA

**Key words:** Ancient India, thunder god, lightning, etymology, theology

Among the various heroic deeds of the god Indra extolled in the religious poetry of the Ṛgveda (ca. 1200 BCE), the foremost one is the battle with Vṛtra 'obstacle', a gigantic cobra enclosing the waters. In this battle Indra kills Vṛtra and releases the waters to the world. It is because of the prominence of this event ascribed to Indra in the Ṛgveda that the ancient etymologist Yāska (ca. 5th–4th c. BCE) declares 'the slaying of Vṛtra' (*vṛtravadha*) and 'the giving of water (essence)' (*rasānupradāna*) to be the main activities (*karman*) Indra performs (Nirukta 7.10). Yāska states elsewhere that etymologists (*nairukta*) understand the word *vṛtra* as a name for 'cloud' (Nirukta 2.16), which amply indicates that 'the slaying of Vṛtra' and 'the giving of water' in question should mean 'the opening of clouds' and 'the producing of rain'. Accordingly, Yāska first etymologizes the name *indra* by making use of the word *irā* 'refreshment' which is clearly intended to denote 'rainwater' as in Ṛgveda VII.65.4 (*ilā*), thus characterizing Indra as a rain god (Nirukta 10.8). This type of etymological interpretation of the name *indra* is not found in Vedic literature before the Nirukta.

Yāska takes the accounts of the slaying of Vṛtra and the release of the waters, provided in the Ṛgveda, as metaphorical expressions (*upamā*) of the natural phenomenon of rainfall (Nirukta 2.16). According to Yāska, rainfall takes place when water and light are mixed together (*apāṃ ca jyotiṣaś ca miśrībhāvakarmano varṣakarma jāyate*). This explanation is evidently based on empirical observation of a natural phenomenon in which water starts falling as rain from clouds with occasional flashes of lightning. It is therefore reasonable to suggest that Yāska perceives the natural phenomenon of rainfall as consisting of three elements: clouds, (rain)water, and lightning. Among these, the former two correspond to Vṛtra and the waters encompassed by it. Then, it is most natural to deduce that in Yāska's theology lightning corresponds to Indra, who kills Vṛtra and releases the waters; and hence this god turns out to occupy the same position as another god of lightning residing in the midspace region (*antarikṣa*): Jātavedas, one of the three fiery gods in Yāska's system (Agni, Jātavedas, Vaiśvānara). Śaunaka (ca. 5th c. CE) even identifies Indra with Jātavedas in Bṛhaddevatā 2.30.

In Yāska's theology, Indra is most prominently a personification of lightning who dominates the mid-space region (Nirukta 7.5; 7.10) and controls the rainfall that is indispensable for human life.